モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究

日大生産工（院）　杉本　弘文　　日大生産工　川岸　梅和
モンゴル科学技術大学　I. ゴンチクバト　　日大生産工　北野　幸樹

1. はじめに

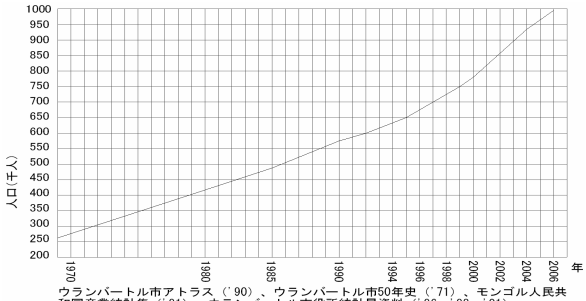
近年、首都ウランバートルにおいては地方からの人口流入が顕著であり、人口増加率は 1990 年から 2004 年の約 15 年間で約 161%に上り、現在もウランバートルの人口は急激に増加している。（図 1）1999 年から 2001 年に起こったゾド（雪害）やガン（干害）[注1] などにより大量の家畜を失い、遊牧を棄てた遊牧民の多くが都市に職を求めて流入していることは、重大な社会問題となっている。

現在、ウランバートルは不法に移住した人々を含めると、人口 100 万人の都市になっていると言われている。このような流入者の生活を支えるものは市街地周辺部の「定住ゲル」である。本来移動用の住居として用いられてきたゲルが都市に持ち込まれ、「定住ゲル地区」を構成し、都市周縁部に拡大している[注2]。このように、草原のゲルに住む伝統的な遊牧社会の中で暮らしてきた遊牧民は、現在徐々に近代化への流れの中で、都市化・定住化へと進む意識が強まってきている。

しかし、現在モンゴルは全国民の約 35%が草原のゲルに暮らしている「遊牧国家」であり、この伝統的な遊牧を中心とした牧畜産業は GDP の約 30%を担っている。従って、モンゴルは世界に類例のない遊牧社会と都市定住社会が共存しているという固有の特性を有していると言えよう。

モンゴルの伝統的な遊牧社会は、自然環境や家畜と密接に関わり合いながら、自ら移動し、草原地を利用していくことで環境に適応すると共に、自然環境への環境負荷が極めて少ない資源循環型の生活体系を有している。

本研究に関連する既往の研究として、「モンゴルの住宅政策と住宅事情」[1]「社会主義都市の民主化による土地と住宅の概念の変化」[2]「都市居住様式と住環境」[3] 等に関する研究が行われているものの本研究に関連する既往研究は少ない。遊牧生活における生活空間や生活環境とそこに暮らす居住者（遊牧民）の生活意識との関係性について報告された研究はみられず、本研究の独自性はここにあると考えている。



ウランバートル市アトラス（'90）、ウランバートル市50年史（'71）、モンゴル人民共和国産業統計集（'91）、ウランバートル市役所統計局資料（'96、'98、'01）、MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2006、外務省ホームページより作成

図１　ウランバートルの人口推移

2. 研究の目的

本研究では、固有の地域環境・資源に立脚した資源循環型環境をどのようにして保持し展開していくことが可能か、遊牧民が創り出す資源循環型社会における地域特性に立脚した持続可能な生活・居住環境づくりと共生に関する計画的方法論の検討を行うために、遊牧民に対するアンケート調査を行った。それにより遊牧民の生活意識、生活実態・活動実態、並びに環境共生のシステム・手法を明らかにし、遊牧民固有の資源循環型生活環境をどのようにして保持し展開していくことが可能かを検討し、人・活動・空間の相互浸透関係に立脚したモンゴル独自の生活空間計画の方向性を明らかにすることを目的としている。

本稿では、ウランバートル近郊に暮らす遊牧民に対するアンケート調査を基に、遊牧民の生活意識・活動の傾向的特性を明らかにすることにより、伝統的な遊牧社会の中で育まれてきた環境負荷の少ない生活体系と生活・コミュニティ意識の関係性について考察し、遊牧生活における生活意識・生活環境に関する基礎的知見を得ることを目的としている。

3. 調査・分析方法

本研究ではウランバートル近郊に暮らす遊牧民を対象として、2006 年 8 月に遊牧民の生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査及びヒアリング調査を行った。アンケートの配布･回収の方法は、調査対象とした遊牧民世帯を直接訪問し、調査の主旨を説明した上でアンケートを配布（57 部）すると共に、回収についても配布と同様に各世帯を直接訪問し回収（57 部）した。尚、アンケート調査は各世帯を対象に 1 部ずつ配布し、世帯主より回答を得た。

本稿においては、１）遊牧民は、数世帯が集まってホト・アイル[注3] と呼ばれるグループを構成して宿営地をつくり、遊牧生活を行っていること、２）遊牧民に

Study on Living Environment of Nomads Residing in Suburbs of Ulaanbaatar, Mongolia
Hirofumi SUGIMOTO, Umekazu KAWAGISHI, Ishjamts GONCHIGBAT and Koki KITANO

とって夏季は、他の季節に比べ温暖な気候や様々な牧畜作業と収穫により、1 年で最も快適な季節を過ごすことのできる時期であるとともに、遊牧民にとっては、他の季節に比べ宿営地に多くのゲルが集まり、世帯同士及びグループ（ホト・アイル）同士が協力関係を持ち、共同作業や祝宴（祭りや儀礼）が最も盛んに行われる時期であること等を考慮し、他の季節とは異なった特徴を有する夏季（8 月）の宿営地において調査を行うと共に、遊牧生活を共にしている世帯・グループ単位でアンケート調査の結果を整理し、生活活動・行為の実態と生活意識の傾向的特性を明らかにする。

尚、調査を行った地点は図 2 に示す通り、調査地ＡとＢであり、各々ウランバートルから約 50 km及び 80 km圏域に位置している。

4. 遊牧民に対するアンケート調査

4-1. 調査対象遊牧民世帯の属性

1）グループ構成及び家族構成（表 1）

アンケート及びヒアリング調査よりグループ分類を行った結果、調査対象遊牧民世帯は 1 グループを 1 世帯から 4 世帯で構成していること[注4)] が判明した。（表 1）

平均世帯人数は概ね 5～6 人の世帯が多く、平均子ども人数は 3～4 人となっている。平均世帯人数・平均子ども人数共に、各グループで大きな差異はみられない。また、世帯主の平均年齢は 40 代後半、配偶者の平均年齢は 40 代前半が多くなっている。

収入源となる職業については約 8 割の世帯が「牧畜業」であり、その他の中で「年金受給」の世帯がみられた。

4-2. 遊牧民のライフサイクルについて

1）遊牧民の移動性（図 3）

①遊牧民の 1 年間の移動（遊牧）の流れ

遊牧民の 1 年間の移動（遊牧）の流れをアンケート調査及び参考文献[注5)] を基に図 3 にまとめた。その特徴を整理すると、1）遊牧民はそれぞれの季節及び家畜の生態（生殖・飼養・搾乳等）に合わせて移動し、自然環境に適した場所に宿営地を構える。夏営地においては家畜の飼養や搾乳、それに伴う乳製品づくりが活動の中心であり、川の近くや風通しの良い場所など、遊牧民及び家畜にとって 1 年で最も快適な季節を過ごすにふさわしい場所を宿営地としている。 2）宿営地に集まるゲルの数は自然環境や季節に応じて変わる（概ね夏季は集合し、春・秋・冬季は分散する）。従って、ゲルが個別的かつ閉鎖的に暮らす 3 つの季節（春・秋・冬）と、ゲルが集合しつつ、人々が共同作業や祝宴を通じて開放的に暮らす季節（夏）に大別できる。 3）自然環境が厳しい時期（草が少ない時期、自然災害の発生時等）にはオトル[注6)] を行い、家畜の飼料となる草を求めて移動する。また、秋営地においては、厳しい越冬前に家畜を肥育させるためにオトルが多くなる傾向がある。 4）春営地と冬営地は通常近接していることが多い。

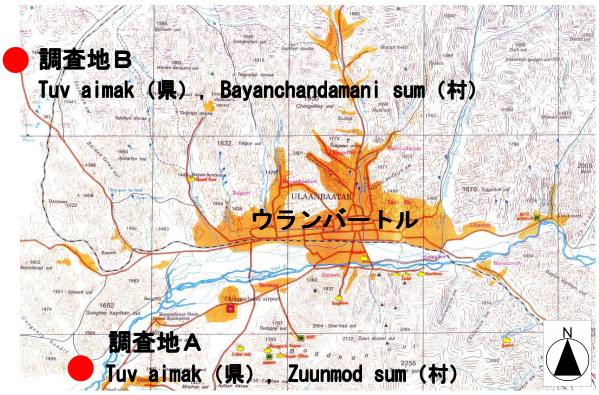


図 2　遊牧民アンケート調査・調査地点

表 1　グループ構成及び家族構成

	1F1G	2F1G	3F1G	4F1G	合 計
事 例 数（世 帯 数）	14（14）	10（20）	5（15）	2（8）	31（57）
平 均 世 帯 人 数（人）	5.4	4.8	5.9	5.4	5.4
世 帯 主 平 均 年 齢（歳）	52.0	47.6	45.9	47.1	48.1
配 偶 者 平 均 年 齢（歳）	47.2	43.2	44.1	44.1	44.7
平 均 子 ど も 人 数（人）	2.9	2.6	3.3	2.9	2.9

②移動の頻度及び距離、移動の条件・理由

図 3 に示した通り、移動の頻度は概ね年 4 回であり、同じ場所で 2～4 ヶ月間を過ごしている遊牧民世帯が多く、グループ構成によって差異はみられない。

移動距離においては、5 kmから 150 kmと幅広く、「牧草地の様子によって移動距離を変える」「夏の気候によって変わる（夏はモンゴルでは雨季にあたる）。雨の多い年は草が多いので移動距離は短くなるが、雨の少ないときは草を追って移動する」「家畜の肉つきにより移動する距離を変える」といった意見が見られた。また、調査時点（8 月）で同一のグループ内においても、各世帯により移動距離は変わる傾向がみられたことから、季節によってグループ構成（ホト・アイルに集まる世帯の数）が柔軟に変わっていることが裏付けられたと言えよう。

移動の条件・理由を自由意見より抽出すると、「家畜の肥育状況」「家畜の様子を見て移動距離を変える」「草原地の草や植物の量」「自然環境（季節の変化や気候等）に合わせて」「ガン・ゾドの自然災害の時は移動の回数が多くなる」等が挙げられた。

③移動する際に行う土地（自然）への配慮

移動する際に土地（自然）に対して配慮している事項を自由意見より抽出すると、「ゴミの処理をした後、土地の神様に感謝し乳製品を供える（儀礼）」「また戻ってくるので土地を元に戻すように出来る限りきれいにする」「人の手が加わって変えたもの全てを元に戻す」「モンゴルの伝統的な習慣を守って土地を掃除し、掘った穴を埋める」等が挙げられ、概ね全ての遊牧民世帯が儀

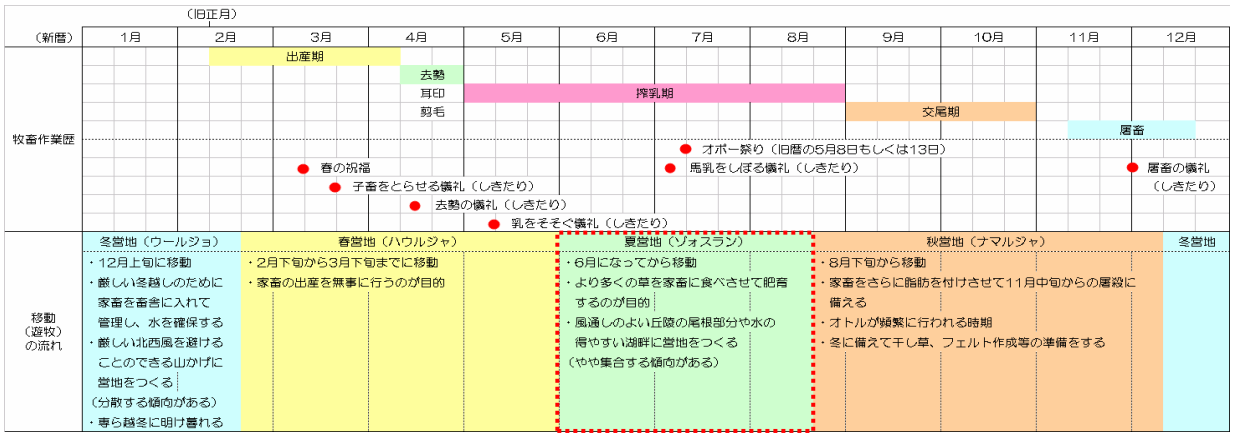


図 3　遊牧民の 1 年間のライフサイクル

礼・習慣・掃除への高い意識を有していると共に、保持していることが判明した。

2）遊牧民の移動性に対する意識

移動を繰り返す遊牧民の生活スタイルに対する意識を自由意見より抽出すると、「移動を繰り返すことは家畜の飼養に良いことであり、私達にとって美しい自然の中で暮らすことができ、健康にも良い」「いつも違う場所に繰り返し移動することで色々な人と出会え、新しい隣人が出来ることも楽しい」等、現在の遊牧生活に良い評価をしている世帯が多く見られる。一方で、「移動は大変」「定住スタイルの方が良いと思う」と答えた世帯もみられ、その要因として「（社会主義時代に比べて）政府から遊牧民達への援助が少ない」「最近は牧草地をお金持ち達が所有しているので私達が家畜と移動できる地域が狭くなっている」といった点が挙げられる。

4-3. 近隣の世帯同士での協同（働）について

1）近隣の世帯との付き合い（図 4）

近隣の世帯との付き合いの状況に関しては、全てのグループにおいて「ほとんど近隣の世帯を知らない」の割合は 0%であり、「親しくお付き合いをしている世帯がある」「生活していく上で協力し合っている世帯がある」が高い割合を占めている。このことから遊牧民世帯は単独の世帯のみで生活しているのではなく、他の世帯と関わり合いを持ちながら遊牧生活を営んでいると言えよう。

2）協同（働）活動の内容

近隣の世帯同士での協同(働)活動の内容に関しては、家畜の世話（生殖・飼養、哺乳・搾乳管理）、草原の手入れ（草原地の管理、家畜の飼料となる草刈等）、フェルト作り、井戸の管理等、広範囲に及ぶ。

また、より親しく付き合いをしている世帯では家事（病気の時の助け合い、子育ての協同等）や宿営地の移動の協力も行っている。加えて、日常生活の中での余暇活動（「テレビを見る」「酒を飲む」「子どもの遊び」等）においても近隣の世帯同士で互いのゲルを行き来しながら、密接な関わり合いを有している。

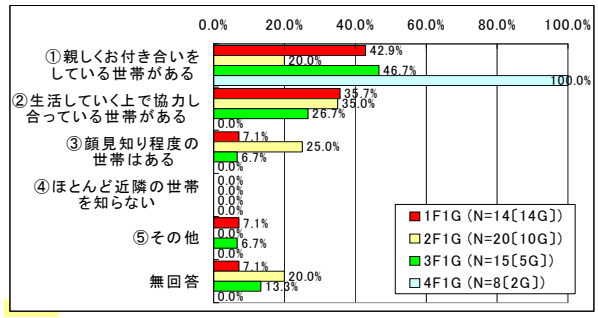


図 4　近隣の世帯との付き合いの状況

4-4. 現在の遊牧生活への満足度及び継続意向

1）遊牧生活への満足度（図 5）

遊牧生活への満足度[注 7)] に関しては、1F1G では満足層が 78.6%、不満足層が 7.1%である。2F1G では満足層が 60.0%、不満足層が 15.0%である。3F1G では満足層が 53.3%、不満足層が 26.6%である。4F1G では満足層が 75.0%、不満足層が 25.0%である。各グループ共に満足層の割合が高く、満足層の回答理由では「受け継がれてきた遊牧生活を楽しみながら子どもたちと良い暮らしをしている」「住み慣れたこの生活が良い」「家畜から貰う恵みで豊かな生活ができている」等が挙げられた。一方、不満足層の回答理由では「最近はガン、ゾドなどの自然災害が多くなっており、遊牧生活はリスクが高くなっている」「遊牧民の子ども達は教育水準が良くなく、最新の情報が入らない」「インフラ（水・電気など）や医療施設などの普及が十分ではない」などが挙げられた。

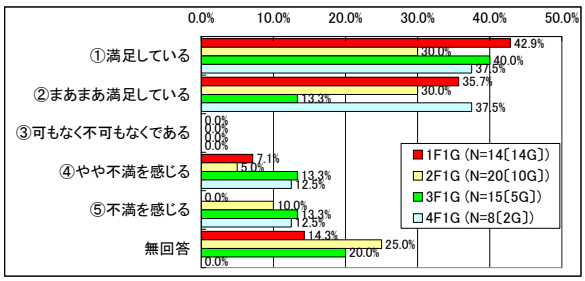


図 5　遊牧生活への満足度

2）遊牧生活の継続意向の有無（図 6）

遊牧生活の継続意向の有無に関しては、各グループ共に「現状を維持し、続けていきたい」「少々改善したいことはあるが続けていきたい」と答えた継続意向のある世帯の割合が多くを占めている。継続していきたい理由では、各グループに共通して「現在の生活スタイルが気に入っているから」「経済的理由から」が挙げられた。都市に移住したいと思う理由では、各グループに共通して「子どもの将来を考えて」「病気の治療を受けるため」「より収入の高い雇用を求めるため」が挙げられた。

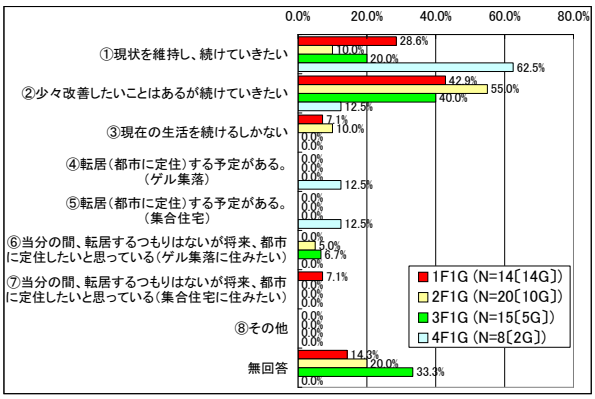


図 6　継続意向の有無

5. まとめ

本稿より得られた遊牧民の生活環境及び生活意識と活動・行為に関する知見を要約すると以下のようである。

①遊牧生活の糧となるのはマルとよばれる 5 畜[注 8)] であり、家畜は食用以外にも様々な用途に利用され遊牧民の生活と深い関わり合いを有している。遊牧生活においては、移動を繰り返しながら生活することにより、遊牧民自らが家畜や自然環境に適応しながら人と家畜、人と自然が共生した自然に負荷の少ない資源循環型の生活環境を創り出している。

②ホト・アイルは社会主義以前から存在するモンゴル遊牧民の近隣共同体[注 9)] であり、性質も習性も異なる 5 畜を保有し管理すると共に、それらから得る資源を最大限に活用するために、遊牧民は協同（働）活動を通して近隣世帯との関わり合いを持ちながら、協同性を基礎として、人と人が共生し、相互扶助関係に立脚した生活環境を構築している。

③夏季は、遊牧民にとって剪毛（家畜の毛の刈り取り）作業、フェルト製作、搾乳、乳製品加工等の家畜に関する様々な作業が行われ、各世帯・グループ同士が協力関係を持ち、1 年間で最も共同作業や祝宴（祭りや儀礼）が盛んに行われる時期である。このことは他の季節に比べ夏営地に多くのゲルと人々が集まる傾向との関連性がみられると共に、他の季節とは異なる集いつつ開放的に暮らす遊牧民の生活活動が展開されていると言え、人と活動が相互に浸透した状況を創り出している。

④ 現代の遊牧民の生活環境においては、自然災害の増加、遊牧民の子ども達の教育の場の減少、医療施設の不足、土地の所有権の発生[注 10)] 等により、都市への定住意向も顕在しつつあると考えられる。その一方で、遊牧民の遊牧生活から生み出される生活環境に対する満足度は総体的に高く、受け継がれてきた遊牧生活を楽しみ、自然からの豊かな恵みを得ると共に、自然に対して高い意識を有し、かつ、そのライフスタイルを継続していることが明らかとなった。それは、相互に遊牧民が協同（働）して、自然及び家畜と共生し、環境特性に立脚した持続可能なライフスタイルを営む方法論を独自に築き、実践し、展開していることを裏付けていると言えよう。

今後は、遊牧民の生活環境づくりにおける人・活動・空間（自然）の関係性について、より多角的な視座より把握し、遊牧社会から都市化・定住化されていく過程の中で、いかにして固有の地域資源・地域環境に立脚した資源循環型環境を現代社会（都市定住社会）へ応用していくか、研究を展開していくことを考えている。

注釈

注 1) ゾド（雪害）とは、冬の降雪により草が雪に埋もれて放牧が困難になることで、雪がなくて温度が低いだけの凍害もゾドと呼ばれている。ガン（干害）とは、夏の降雨量が少なく、草が育たないことである。

注 2) 拡大する定住ゲル地区において調理と暖房に使用するストーブでの石炭の燃焼により排出される煙は大気汚染や健康被害を引き起している。

注 3) モンゴルの遊牧民は白いフェルトで覆われた天幕（ゲル）に各世帯が暮らしており、この世帯をアイルという。遊牧民は通常、数家族が連なって生活している。このグループをホト・アイルという。

注 4) 本稿では、1 世帯のみで構成している事例を 1F1G、2 世帯で 1 グループを構成している事例を 2F1G、3 世帯で 1 グループを構成している事例を 3F1G、4 世帯で 1 グループを構成している事例を 4F1G と記述する。

注 5) 図 3 の作成においては、参考文献 5）及び 8）を参考にしている。

注 6) オトルとは、季節的な宿営地の間の移動に加えて、更に別途移動する分派的移動であり、一部の者が（大抵は男のみ）家畜の一部を連れて移動する。ゾドやガンの時などには難を避けるためにオトルが多くなる。環境の変化に柔軟に対応するための移動の形態である。

注 7) 「満足している」「まあまあ満足している」を満足層、「やや不満を感じる」「不満を感じる」を不満足層としている。

注 8) 「マル」とはモンゴル語で「財産」の意味であり、遊牧民の生活の糧となる山羊・羊・馬・牛・ラクダの 5 種類の家畜を指す。

注 9) 参考文献 6）によると、pp.15 においてホト・アイルを「近隣協同体」と表現している。

注 10) 1996 年に集合住宅私有化法が策定され、これまで国有化されていた不動産の私有化が認められた。また、2002 年 6 月には「土地所有法」（2003 年 5 月施行）が策定され、18 歳以上のモンゴル国民（世帯ごと）及び企業の土地所有が可能となった。

参考文献

1) バダラハ・バタボルト、眞嶋二郎：　モンゴルの住宅政策と住宅事情―社会主義体制から民主化・市場経済体制への変遷―　日本建築学会大会学術講演梗概集　p.p.1083～1084　1998 年 9 月
2) 岡絵理子、鳴海邦碩、ウィトメン・トメンジャルガル：　社会主義都市の民主化による土地と住宅の概念の変化に関する研究―モンゴルの首都、ウランバートルを事例に―　2002 年度第 37 回日本都市計画学会学術研究論文集　p.p.637～642　2002 年 11 月
3) 中村和喜、野口孝博、福島明、B.Batbold、I.Gonchigbat、辻井順：　集合住宅における居住者の方位観と平面構成 モンゴル、ウランバートル市における都市居住様式と住環境に関する研究 その 1　日本建築学会大会学術講演梗概集　p.p.13～14　2003 年 9 月
4) MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2006, National Statistical Office of Mongolia
5) 小長谷有紀：「モンゴル草原の生活世界」　朝日新聞社　1996 年 4 月
6) 島崎美代子他：「モンゴルの家族とコミュニティ開発」日本経済評論社　1999 年 7 月
7) 「遊牧民の建築術」　INAX 出版　2000 年 4 月
8) 小長谷有紀編著：「アジア読本モンゴル」河出書房新社　2002 年 5 月
9) 宮脇淳子：「モンゴルの歴史」　刀水書房　2002 年 9 月
10) 小長谷有紀編著：「遊牧がモンゴル経済を変える日」出版文化社　2002 年 11 月
11) 小長谷有紀：「モンゴルの二十世紀」　中公叢書　2004 年 8 月